様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：34315
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：：2008～2012
課題番号：20520142
研究課題名（和文）　小型映画文化のアーカイヴ構築にむけた基礎的研究
研究課題名（英文）　Basic study for the construction to archive of the small gauge film culture

研究代表者
冨田 美香（TOMITA MIKA）
立命館大学　映像学部　准教授
研究者番号：30330004

研究成果の概要（和文）：フィルム・アーカイブにおける小型映画の保存方法の調査をふまえ、1920-1930 年代のホーム・ムービーなど 9.5mm、16mm の小型映画 200 本を対象に、カタロギング・複製・保存を実施し、小型映画文化アーカイブの基礎を形成した。また、1940 年代までの、京都における小型映画制作･上映活動の様相、日本の小型映画ネットワークの形成と特徴、日本とアメリカの交流、を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：On the basis of the research on the preservation method of small gauge films in film archives, I carried out cataloging, duplication, and preservation for 200 films (9.5 mm and 16 mm), such as home movies from the 1920s through the 1930s. Moreover, in separate papers, I clarified the making and screening of films in Kyoto until the 1940s; the formation and characteristics of the Japanese small gauge film club network; and the exchange between Japanese and American amateur film networks.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：芸術諸学、映画学、表象文化論、アーカイブ、大衆文化

１．研究開始当初の背景

代表者は、京都の劇映画を対象にした京都の映像文化アーカイブの調査研究をおこなってきた中で、「“都をどり”を収めた一六ミリ映画について――日本における小型映画文化」（『科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究成果報告書「芸能・演劇分野の無形文化財保存の方法に関する基礎的研究」無形文化財と記録・保存（都おどりの一六ミリ映画を題材として――）』、2001 年）をまとめたように、ホーム･ムービーの広大な文化状況と現存情報に接し、従来の研究活動を一歩広げる必要性を感じるにいたった。その後、200 本強の小型映画コレクションを入手したが、これらの作品群を研究対象とするには、小型映画特有の媒体・再現の特性を調査し、カタロギング、媒体変換、保存・復元などに関する方法論の調査が必須であり、かつ、それらに

関しては、スタンダードが存在しないことが判明した。媒体変換方法もまちまちであり、組織によっては、媒体変換を優先する結果、小型フィルムそのものを損壊する方法をとっていることも明らかになった。このような状況を前に、代表者は、国内での小型映画アーカイブの一つの規範となる基礎研究を行い、小型映画アーカイブの基盤形成を実践・提起するべく、実際に収集した作品群を対象に、国内のアーカイブ機関や小型映画研究者の協力体制を確保し、ワークショップなども含め若手研究者の育成もかねた本研究を開始することにした。

小型映画研究の第一人者であるZimmermann は、アメリカでの小型映画通史を達観し、日常の家族生活を見世物、驚き、重要なものへと高める家庭の記憶の構築を強調する美学的言説（Patricia Rodden Zimmermann, Reel Families : A Social History of Amateur Film , Indiana University Press, 1995）とし、中産階級の家族の概念化と産業による植民地化の機能としても、近代社会におけるその重要性を簡潔に説いている。本研究は、劇映画の補足映像としてではなく、そのような小型映画文化自体のアーカイブ構築を目的とし、その媒体と受容、復元･保存方法の調査と実践を行なうものであり、小型アーカイブの方法や体制の基礎を築く研究として、国内でははじめての試みといえる。

２．研究の目的

本研究の目的は、大別すると、先ず以下（１）～（３）の３点を実施することにある。

（１）昭和初期の家庭で享受された豊穣な映像文化の様相を明らかにするとともに、京都における映像文化アーカイブの一端に、現代の映像文化の原点ともいえる小型映画でのホーム・ムービーの受容様相を加えること。

（２）小型映画フィルムの保存および復元方法の提案と実践を行うこと。

（３）これらの研究活動をとおして今後の小型映画文化アーカイブの基礎を築くこと。

具体的には､以下 A と B のコレクションを主な対象とし、それぞれについて以下①～⑥の６点を明らかにすることにある。

A.昭和初期の京都ならびに京都の映画文化状況を写した小型映画４０本

B.大正期から昭和初期にかけての 9.5mm作品２００本

①フィルムの状態と特徴

②フィルムのカタロギング方法とカタロギングの完成

③小型映画文化（フィルムならびに受容形態）の復元方法と保存方法

④媒体変換（テレシネ）による映像情報の複製方法

⑤作品内容と評価に関する文化的調査

⑥国内での小型映画文化保存の現状。

３．研究の方法

上記の研究目的に対して、以下の研究方法を段階的にすすめた。

(1)フィルムの状態と特徴

→2008～2009 年度

イマジカウェスト、東京光音の協力を得て実施。

(2)フィルムのカタロギング方法とその完成

→2009～2010 年度

下記（6）の調査先を参考に実施。

(3)小型映画文化の復元方法と保存方法調査

→2010～2012 年度

(4)媒体変換による映像情報の複製方法調査

→2009～2011 度

東京国立近代美術館フィルムセンター、イマジカウェスト、東京光音の協力を得て実施。

(5)作品内容と評価に関する文化的調査

→2011～2012 年度

文献資料収集

早稲田大学演劇博物館

コロンビア大学東亜図書館（NY）

ニューヨーク州立図書館

ジョージ･イーストマンハウス（NY）

(6)国内外での小型映画文化保存の現状調査

→2008～2012 年度

東京国立近代美術館フィルムセンター

京都文化博物館

神戸映画資料館

NPO 法人映画保存協会

ジョージ･イーストマン・ハウス（NY）

韓国映像資料院（ソウル）

４．研究成果

本研究の目的として前記した（１）～（３）および①～⑥は達成した。

具体的には、コレクション A（小型映画 40 本、16mm）および B（9.5mm　200 本）についての、①フィルムの状態と特徴、②フィルムのカタロギングを終了した。そのうちの 5 本は、③小型映画文化（フィルムならびに受容形態）の復元方法と保存方法の研究として、東京国立近代美術館フィルムセンター、イマジカウェスト、東京光音の協力を得て 35mm へのブローアップを行った。35mm へブローアップした作品およびメディアによる画質の違いについての研究成果は、京都文化博物館（2010 年 3 月 5、7 日、http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/KCSG/2010/03/post-21.html）、東京国立近代美

術館フィルムセンター（2010 年 5 月 16 日、http://www.momat.go.jp/FC/NFC_Calendar/2010-5/kaisetsu_13.html)、神戸映画資料館（2010 年 10 月 16 日 http://www.kobe-eiga.net/event/2010/10/8.php)、において上映と講演を行った。また、予算的な問題から、40 本を選択し、④媒体変換（テレシネ）による映像情報の複製を行った。この媒体変換による映像情報の複製に関しては、本研究に着手した当初に比べると「ホームムービーの日」が盛んになるなど小型映画を巡る環境がかわっており、イマジカウェストで映写機を使わない手動簡易テレシネ機が試験的に開発されるなど、大きな進展があったことを補記しておく。

⑤の作品内容と評価に関する文化的調査については、小型映画に関する文献の収集や、早稲田大学演劇博物館、コロンビア大学東亞図書館（NY)、ニューヨーク州立図書館、ジョージ･イーストマン・ハウス（NY）において小型映画誌を網羅的に調査し、1940 年代までの､京都における小型映画制作･上映活動の様相、日本の小型映画ネットワークの形成と特徴、日本とアメリカの交流、を明らかにした。これらの成果は、次項の論文、発表を参照されたい。

⑥の国内での小型映画文化保存の現状調査については、フィルム収蔵庫を完備している機関を主な対象とし、東京国立近代美術館フィルムセンター、京都府京都文化博物館、神戸映画資料館、ジョージ･イーストマン・ハウス（NY)、韓国映像資料院（ソウル）などを調査した。「ホーム・ムービーの日」の日本事務局を担当している NPO 映画保存協会の小型映画部に関しても、資料とヒアリングを通してカタロギングや保存方法について調査をおこなった。これらの結果、35mm を基本に構築されているフィルム・アーカイブでは、小型映画の中でも特に 9.5mm や 8mm といったフィルムに関しては、収蔵庫の設計と収納量、機材、備品の問題から、35mm や 16mm の備品や収蔵庫を活用している場合が多く、サブ・スタンダードのフィルムやメディアの保存の問題があらためて浮き彫りになった。今後の課題として、スタンダードフィルム以外の映像メディアを主な対象としているアーカイブを調査し、そこでの保存方法を参照することが必要と思われる。

これらの研究成果とアーカイブ映像の活用・普及については、web や冊子、単著、上映会、映像アーカイブ授業や公開ワークショップを通して還元している。一部については、次項の〔その他〕項目を参照されたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①冨田美香「戦前小型映画誌 Movie Makers にみるアメリカの日本イメージ」、『アート･リサーチ』、査読有、13 号、2013 年 3 月、37-48 頁。
②冨田美香「「大映カラー」：イーストマン・コダック カラーシステムの誕生」、査読無、（編）ワダ・マルシアーノ・光代『「戦後」日本映画論』、2012 年 10 月、青弓社、306-331 頁。
③冨田美香「戦間期日本における小型映画文化の様相―映画都市京都のもう一つの顔―」、査読無、（編）冨田美香・木立雅朗・松本郁代・杉橋隆夫『京都イメージー文化資源と京都文化－』、2012 年 3 月、ナカニシヤ出版、103-118 頁。 Mika Tomia"Aspects of Small-Gauge Film in Interwar Japan: Another Face of the "Cinema City" Kyoto(Translated by Takuya Tsunoda)" pp.223-240.
④冨田美香「古都から映画都市創生のトポロジー ―作る人、見る人、かける人の相関―」、査読無、『日本映画は生きている 第３巻 観る人、作る人、掛ける人』、2010 年 9 月、岩波書店、121-144 頁。
⑤冨田美香「フィルム･アーカイブの活動と倫理的問題」、『映像文化の創造と倫理』、査読無、立命館大学映像学部、2010 年 3 月、7-13 頁。

〔学会発表〕（計８件）
①冨田美香「帝国日本のアマチュア映画文化朝鮮での展開」、『JSPS 二国間交流事業共同研究 シンポジウム植民地期の韓国映画と日本映画の交流について』､2013 年 3 月 2 日、立命館大学（京都)、共催：JSPS 二国間交流共同研究 The Study of Film Exchanges between Korea & Japan during the Colonial Period、立命館大学アート･リサーチセンター、立命館大学コリア研究センター、立命館大学・研究の国際化推進プログラム。
② Mika Tomita "Aspects of "Self" and "Other" in the Japanese Small-Gauge Film Culture during Imperial Era.", International Symposium on Japanese Studies "Self and Other in Japan – Mutual Representations" Center for Japanese Studies, 4 March, 2012, University of Bucharest(Bucharest 、Romania).
③冨田美香「帝国日本の小型映画文化と朝鮮での受容」、2011 年度二国間交流事業共同研究「植民地期の韓国映画と日本映画の交流について」研究会、2012 年 2 月 21 日、漢陽大

学（ソウル、大韓民国）。
④Mika Tomita "Aspects of Small-Gauge Film Culture in Prewar Japan", A Symposium The Makino Collection at Columbia: the Present and Future of an Archive, November 11th, 2011, Columbia University(New York, USA).
⑤Mika Tomita "Aspects of the Place and the Memory in “Ballad Film” in 1930s", 13th International Conference of EAJS,2011, 26 August 2011, Tallinn University(Tallinn, Estonia).
⑥冨田美香「大映カラー」：イーストマン・コダック カラーシステムの誕生」、国際日本文化研究センターシンポジウム「1950 年代日本映画における『戦後』の構築研究」、2011 年３月 19 日、国際日本文化研究センター（京都）。
⑦冨田美香「日独合作映画『武士道』（1924 年、東亜キネマ）にみる日本表象」、「他者になること―東西文化の体験と変容の物語」、2009 年６月２日、国際日本文化研究センター（京都）。
⑧冨田美香「戦前日本における映画検閲＜残酷＞と＜民族」、The European Center for Japanese Studies in Alsace (CEEJA)、March 20th, 2009, Strasbourg University (Strasbourg、France)。

〔図書〕（計２件）
①（編）冨田美香・木立雅朗・松本郁代・杉橋隆夫『京都イメージ－文化資源と京都文化－』、ナカニシヤ出版、2012 年３月、256 頁。
②（編）赤間亮・冨田美香『日本文化研究とイメージデータベース』、ナカニシヤ出版、2010 年３月、276 頁。

〔その他〕
○ホームページ
①冨田美香、コーディネート授業テキスト「特殊講義 映像文化の創造と倫理 I アーカイブと映像マネジメント」2009 年度
http://www.ritsumei.ac.jp/eizo/gp/report.html
②冨田美香、コーディネート授業テキスト「特殊講義 映像文化の創造と倫理 I アーカイブと映像マネジメント」2008 年度
http://www.ritsumei.ac.jp/eizo/gp/backnumber/report2008.html

○アーカイブ上映・講演
①冨田美香「エトナ映画の自画像」、「神戸映画資料館 ホームムービーの日」2010 年 10 月 16 日、於：神戸映画資料館
http://www.kobe-eiga.net/event/2010/10/8.php
②冨田美香「小型映画が紡いだ映画文化の世界 ――エトナ映画、日活、9.5mm――」、『NFC ニューズレター』、90 号、2010 年４月、15 頁。
③冨田美香「戦前の小型映画文化――ホーム・ムービーは語る」、「東京国立近代美術館フィルムセンター フィルムセンター開館４０周年記念①発掘された映画たち２０１０」2010 年５月 16 日、東京国立近代美術館フィルムセンター（東京）。
http://www.momat.go.jp/FC/NFC_Calendar/2010-5/kaisetsu_13.html
④冨田美香「映画保存と復元 甦る京都の風景と文化」、2010 年３月５日、７日、京都文化博物（京都）。
http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/KCSG/2010/03/post-21.html

○新聞連載
①冨田美香「現代のことば　そして人生はつづく」、『京都新聞』2011 年５月 18 日。
②冨田美香「現代のことば　映画をめぐる旅―　一之舟入」、『京都新聞』2011 年３月８日。
③冨田美香「現代のことば　『赤ひげ』が教えてくれたこと」、『京都新聞』2011 年１月５日。
④冨田美香「現代のことば 二つの＜映画の日＞を祝う」、『京都新聞』2010 年 11 月１日。
⑤冨田美香「現代のことば “真正な映像”の受容にむけて」、『京都新聞』2010 年９月１日。
⑥冨田美香「現代のことば 映画フィルムを捨てないで」、『京都新聞』2010 年７月６日。

６．研究組織
(1)研究代表者
冨田美香（TOMITA MIKA）
立命館大学　映像学部　准教授
研究者番号：30330004